

# 地の文の述語につかわれる「してしまう」について

## —具体的な場面描写につかわれるばあいを中心に—

呉 幸 栄

### 1. 「してしまう」動詞について

単語の構成・構造からみて、「してしまう」動詞は動詞の第2中止形「Vて」+補助動詞の「しまう」のくみあわせによって、できあがった分析的なかたちをもつ派生動詞<sup>1</sup>である。「する」動詞にたいして、「してしまう」動詞があるのである。「してしまう」は、「してある」、「しておく」とくらべ、これまでの先行研究において、形態論的な「形式(形)」とするうごきはあまりないものの、アスペクト的な意味・機能をになう単位であるとみなす傾向が強い。そのほか、「してある」動詞、「しておく」動詞との一番大きなちがいは、「してしまう」動詞は、継続相「している」のかたちをとることができるのである。

ふるくから、「してしまう」をアスペクト的な意味・機能をになう単位であるとみなす傾向があったものの、一方では、「してしまう」に副次的に、いわゆる「残念や不都合」のような、モダリティーに属するような意味・機能をもちあわせているともみとめられている。

「(…中略) 予期しないこと、よくないことが実現するというニュアンスがつくようである。」(鈴木(1972) p.384)

鈴木重幸のこのような記述は、高橋太郎(1969)の《③〔期待外〕予期しなかったこと、よくないことが実現することをあらわす。》をうけついたのであり、吉川武時(1973)においても、継承されている。しかし、具体的にだれにとっての「残念や不都合」あるいは、「期待外」なのかについては、いずれにおいても、はっきりとふれられていない。「(文の) はなし手」か、あるいは、「「してしまう」動詞があらわす(実現される・された)動作のし手=動作主」か、についてはふれていなかった。このことをはじめて指摘した藤井由美(1992)は、「してしまう」がつかわれる文(おもに終止的な述語につかわれる文)を人称の観点から分析し、「してしまう」があらわす、それまで部分的にみとめられてきた「残念や不都合、期待外」をはっきりと「話し手の態度の表明」としたのである<sup>2</sup>。

たしかに、会話文における、終止的な述語につかわれる「してしまう」動詞のばあいにおいて、わたくしの手元にある用例とてらしあわせるかぎり、藤井の分

析結果とはとくにちがいをみられないものの、小説の地の文となると、現象はことなる<sup>3</sup>。藤井（1992）では、会話文と地の文をわけて記述しているものの、提示している用例の大半が会話文であり、地の文をあまりあつかっていないようにみうけられる<sup>4</sup>。

これまでの先行研究は、「してしまう」のつかわれる文の中の位置のちがいについて気にせず分析をおこなうものがおおかったが、徹底的に、いいおわり文の述語（終止節）につかわれる「してしまう」を対象をしぼったのが藤井（1992）である。藤井は、いいおわり文の述語につかわれる「してしまう」の意味・用法と、つきそい文の述語につかわれる「してしまう」のそれとは、ことなるレベルのものとして、まず、いいおわり文の分析<sup>5</sup>をおこなった。つまり、さきにのべた藤井の「話し手の現実に対する感情・評価的な態度」という「してしまう」の意味規定は、「してしまう」の終止のかたちにかぎることである（そして、会話文にかぎることにもいえよう）。このことについては、実際、藤井自身も（1992）の最後にこうのべている。

「一般的にいて、つきそい文の述語の場合であっても、「してしまう」は話し手の感情・評価を表現している。したがって、「してしまう」がもっぱら動作の終了をあらわすのは、タクシス＝アスペクト的な関係の表現がもとめられている場合にかぎられるだろう。だが、今回の私の論文では、つきそい文の述語の「してしまう」については、まだ調査不十分である。さまざまなつきそい・あわせ文の研究の進展とともに、「してしまう」の研究も深まっていくにちがいない。」（同上 p.39）

やはり、（1992）での分析は、あくまでも、「してしまう」がいいおわり文の述語（おもに会話文）につかわれるさいの意味・用法を分析、一般化した結果であることを、この発言が裏づけている。それまでの先行研究でアスペクト的な意味の1つのない手とみなされてきた「してしまう」は藤井（1992）によってその位置づけについての問題が提起された、といえる。これをふまえ、呉（2007a）（2007b）では、小説の地の文につかわれる終止的なかたちをとる「してしまう」動詞に焦点をあて、一連の分析をおこなってきた。本稿では、さらにその記述をしぼり、具体的な場面描写につかわれるばあいについてとりあげる。

## 2. 地の文の分析

われわれ人間は言語をもちいて、おたがいになにかをつたえたり、はなしあったり、意思疎通する、いわゆる言語活動をおこなう。こういった人間の言語活動によって生産されるのは文であり、文は言語活動のもっとも小さな単位でもあ

る<sup>6</sup>。本稿であつかう地の文とは、小説（＝物語）から採取したもののみをさす。一般的に小説を小説に設定される、主要な登場人物の人称によって、1人称小説や3人称小説にわけることができる。基本的に、物語（小説）の骨格をくみたてのは、物語に設定されている時間的なながれにそって、登場人物がアクチュアルにおこなう動作や行動を描写する文（動詞述語文）である。

けさ、太郎はいつもよりはやく6時におきた。顔をあらひ、歯をみがいたあと、朝食もとらずに学校にむかった。バス停についてまもなくバスがきて、太郎はすこし緊張気味でバスにのりこんだ。今日は定期試験の日だ。太郎はドキドキハラハラしながら、まだだれもきていない教室には行っていった。7時だった。（作例）

「今日は定期試験の日だ。」「7時だった。」の2つの文をのぞけば、これら一連の文がおもに描写しているのは、「太郎」という登場人物がある朝、6時から7時のあいだ、家から学校までのあいだに、「太郎」がおこなった動作・行動、あるいは「太郎」におきた（動的な）出来事である。

このように構築される、いくつかの文のあつまり＝文連続<sup>7</sup>によって、物語が構築されるのだが、さきにとりあげられたような、登場人物による一連の具体的な動作や行動を描写する文のあつまりのほかに、登場人物をとりまく状況、登場人物にかかわる説明（登場人物の性格や特徴）や、物語（小説）においておきた出来事の説明（背景描写）を内容とする文のあつまりもある。

太郎の家は当時まずしかった。ほとんど白いごはんをたべられないくらいまずしかった。ごはんといえば、もっぱらサツマイモにすこし塩をかけたようなお粗末なものだった。しかしそれでもまわりよりはマシであった。（作例）

文は言語活動のもっとも小さな単位であるとさきにのべたが、しかし、特殊なばあいをのぞけば、（地の文でも会話文でも）文はつねに一定の文連続のなかに存在し、（前後する）文脈をとまなうものである。ゆえに文の分析にはつねに文が存在する文脈（コンテキスト）の配慮が必要である。「してしまう」文<sup>8</sup>の分析において、このような配慮はきわめて、重要である。「してしまう」文の分析において、「してしまう」文が存在する1つ、あるいは前後するいくつかの段落をとびこえた観察がつねに要求されている。完結する1つの「してしまう」文は、このような、一連の文の連続のなかで、意味をあらわし、機能をはたす。このことを念頭におかなければ、「してしまう」文を分析することができない。

さきに結論をのべさせていただく。「してしまう」文をふくむ一連の文によって登場人物の一連の動作が語られるが、そのなかで「してしまう」文がさししめず、（ある登場人物の）動作の実現について、よみ手に対する語り手のなんらの強制的な態度があらわされている。小説の地の文における、「する」動詞が終止

的な述語につかわれる文（以下「する」文と略す）と「してしまう」文のもっとも大きなちがいは、「してしまう」文のばあい、「してしまう」文が存在する文連続において、「してしまう」文がさししめす（文の）内容は、「（語り手によって相対的に）強調されている」ことがしめされ、「してしまう」文の述語に「してしまう」動詞につかわれるのである。「してしまう」動詞の使用が、ある文連続においてはじめて（かたり手の評価による、登場人物＝動作のし手の）動作の実現の強調」にもちいられる。

「してしまう」動詞があらわす「（動作や状態変化の）実現の強調」は、文が存在する文連続において、前後の文脈からそれが「どういう」「どんな」、あるいは「なんのため」の「（実現の）強調」であるかがはっきりとよみ手によみとられるばあいが非常におおいが、そうでないばあいもある。しかし、いずれにしても「してしまう」動詞が「動作（状態の変化）が実現することの強調」をあらわすことにはかわりはない。「してしまう」動詞があらわす「ある動作の実現、の強調」は、文連続内においてかたり手がよみ手に注目をむけてほしいとねがうことからであるということから、「してしまう」動詞は、さまざまな修飾語とくみあわせられて文に使用されることがおおく観察できるようにおもわれる。より明白に、動作が実現した（する）ことをきわだたせるために、「してしまう」動詞とさまざまな修飾語との共起が義務的であるようにおもわれる。

### 3. 具体的な場面描写につかわれる「してしまう」文

本稿では、3人称小説から採取した「してしまう」文を中心にとりあげる。そのなかでも、《具体的な場面を描写し、その場面において、継起的に起こるいくつかの出来事（主として登場人物の動作）をえがく、文連続に存在する「してしまう」文にしぼる<sup>9</sup>。

- 1) ¶①道具を抛り出した作阿弥は、すこし離れて、半彫りにかけた馬の像に、見入っている。¶首から胴は一本で、刻みのあとの荒い馬の姿が、半ば出来かかったまま立っている。¶が、この未成品、すでに惻々と人に迫る力を有っているのは、矢張り、作阿弥の作阿弥たる所以であろう。「ウウム、陽明門の登り竜と下り竜が、夜な夜な水を飲みに出るというなら、この、おれの彫った馬は、その竜を乗せて霧降りの滝を跳び越せッ！」「いや、見事々々！」¶作阿弥の独りごとに答えて、別の声がした。¶馬が口を？¶と、②作阿弥老が振り返った時――。¶三¶何時の間にか、この谷へ下って来たのか、登音もしなかったが、と、ギョッ！¶として③作阿弥が、戸口を振りかえって見ると……。¶柳生対馬守。¶家老、

田丸主水正と唯ふたり、ほかに供も伴れずに。『④制作の進行ぶりを、おしのびで見に来られたものとみえます。「何うかの？』足曳はおとなしくじっとして、写生の手本になっておるかの？』と⑤対馬守、手斧の木屑や、散らかっている道具を跨いで、小屋へ這入って来た。『半分板張りになっていて、向うの土間に、殿の乗馬足曳が、つないである。』厩のように、馬と同居しているのですから、ムツとした臭気が鼻を襲う。『それよりも、狼狽たのは作阿弥で、彫刻が完成するまでは、誰にも見せたくない。⑥殿様といえども、眼に触れさせたくはないので、大いそぎで、ゆたんのような唐草模様の大きな布を、ふわりと、彫りかけの馬の像に掛けてしまった。』⑦そして、ひらき直って、対馬守と主水正の主従を、恐ろしい眼で睨みつけた。「ちと無礼で御座ろう。誰に断わって、ここへ這入って来られた！』それは、相手が誰かということも忘れたらしい、芸術心のほか何もものもない、阿修羅のような物凄い形相であった。「最後の鑿を打つまでは、人に見せぬというのが、わしの心願じゃ。この山奥へ籠もっておるのもそのため。御存じであろう。」(丹下左膳・日)

例1)、「大いそぎで、ゆたんのような唐草模様の大きな布を、ふわりと、彫りかけの馬の像に掛けてしまった。」が存在する文連続には、「作阿弥」と「(柳生)対馬守」、「(家老)田丸主水正」が登場人物として存在し、かれらを取りまく状況設定(背景設定)は、「作阿弥が彫刻をつくっている小屋」である。そこには、いくつかの具体的な出来事(主要な登場人物の具体的な動作)が描写されている。すくなくとも、7つを取り出すことができる。

「してしまう」動詞がつかわれているのは、このうちの、6つ目の出来事を描写する文の述語である。文連続を構成する文のうちの、1つの文の述語に「してしまう」動詞がつかわれるということは、「してしまう」文がさししめす内容に、文連続にあるほかの文のそれとちがった、あるなんらかの意義づけがかたり手(ばあいによっては登場人物)によってもたされているとかんがえられる。この「ある意義づけ」を、いまかりに、「登場人物がおこなった動作の実現にたいするかたり手(登場人物)の強調」としておく。「してしまう」動詞があらわす「(動作の実現の)強調」という意義づけは、つねに、「してしまう」文が存在する文連続において実現する。上に列挙された具体的な出来事(主要な登場人物の具体的な動作)を描写する文とともに、(かたり手による)作阿弥のきもちやおもいを説明する文、自分の態度やかんがえをしめす作阿弥の発言(の文)、そして、文連続に描写されている具体的な場面をささえる背景を描写する文によって、構築された文連続、そのもの全体のなかにおいて、「してしまう」動詞の使用がな

りたつのであろう。

よみ手はすくなくとも、「それよりも、狼狽たのは作阿弥で、彫刻が完成するまでは、誰にも見せたくない。」と「殿様といえども、眼に触れさせたくはない(ので)」の文、さらには、作阿弥の発言「最後の鑿を打つまでは、人に見せぬというのが、わしの心願じゃ。この山奥へ籠もっておるのもそのため。御存じであろう。」などの文から、「作阿弥は自分の彫刻が完成するまでのあいだは、だれにもみせたくない」という作阿弥の気持ちをよみとることができる。にもかかわらず、「何時の間にこの谷へ下って来たのか、登音もしなかつた(が)」の文の描写からわかるように、「対馬守と田丸主水正はまえぶれもなく突然、小屋におとずれてきた」のである。それゆえ、狼狽した作阿弥は、大急ぎで彫刻に布をかぶせた。作阿弥の「馬の像に布をかけた」(実現された)動作は、「してしまう」文が存在する文連続にある、そのほかの文や文の成分がさししめす内容との関係において、いかにも作阿弥の、たとえ殿様であっても、だれにもみせたくない気持ちのあらわれと同時に、作阿弥による、対馬守と田丸主水正に像をみせたくないための、突発的な処置ともいえるだろう。完成するまで、だれにもみせたくない作阿弥が、不意にこられた対馬守と田丸主水正をその場からおいだしたり、どなたりする行動をとることもかんがえられたが、しかし、作阿弥はそうはせずに、まっ先に大急ぎで「(布を像に)かける」という行動をとったのである。

不意に訪問された対馬守と田丸主水正にたいする、作阿弥のすさまじい反応は、そのほかに、「(作阿弥は)そして、ひらき直って、対馬守と主水正の主従を、恐ろしい眼で睨みつけた。」とともに、作阿弥の発言、「ちと無礼で御座ろう。誰に断わって、ここへ這入って来られた！」によって、いっそう、うきぼりになっている。作阿弥の「(布を像に)かけてしまった」という、強調という意義づけをもたされている実現された動作は、どういう状況、動作のし手である作阿弥がどういう心境のもとでおこなわれたかがはっきりと文連続に説明されている。「してしまう」動詞があらわす「(かたり手による登場人物の動作の)実現にたいする強調」の根拠は、文連続にあるほかの文によってしめされており、かたり手はそれらの客観的な事実(文がさししめす内容)をふまえてはじめて、述語に「してしまう」動詞をつかうのである。いいかえれば、よみ手に「してしまう」文に注目してほしいというかたり手による「強調」は、文連続にあるほかの文がさししめす内容によって条件づけられているのである。

つぎに、「(紙を)おってしまう」が述語につかわれる文をみってみる。

- 2) ㉑①午後になって、飛騨が警察から帰って来た。②いきおい込んで病室のドアをあけた。③「やあ、」葉蔵がスケッチしているのを見て、大袈裟に叫んだ。「やってるな。いいよ。芸術家は、やっぱり仕事をするの

が、つよみなんだ。」『④そう言いつつベッドへ近寄り、葉蔵の肩越しにちらと画を見た。⑤葉蔵は、あわててその木炭紙を二つに折ってしまった。⑥それを更にまた四つに折り畳みながら、はにかむようにして言った。「駄目だよ。しばらく画かないでいると、頭ばかり先になって。」』⑦飛驒は外套を着たままで、ベッドの裾へ腰かけた。「そうかも知れんな。あせるからだ。しかし、それでいいんだよ。芸術に熱心だからなのだ。まあ、そう思うんだな。——いったい、どんなのを画いたの？」  
(道化の華)

例2)、「葉蔵は、あわててその木炭紙を二つに折ってしまった。」が存在する文連続には、「葉蔵」「飛驒」の登場人物がいる。状況設定は「葉蔵がとまっている病室」である。いくつかの具体的な出来事を取りだすことができ、「おってしまふ」がつかわれるのがその5つ目の出来事を描写する文の述語である。入院している葉蔵がスケッチをしているところに、友人である飛驒がいきおいこんで部屋にはいつてきた。飛驒は葉蔵のスケッチをみようとしたが、葉蔵は「それを2つにおってしまふ」。なぜなら、葉蔵は飛驒に(スケッチを)みせたくないのだ。この葉蔵のきもち、葉蔵の発言、「駄目だよ。しばらく画かないでいると、頭ばかり先になって。」からもはっきりとよみとれる。実際、飛驒に自分のスケッチをみせないためには、「(スケッチを)おる」のほかに、スケッチをかくしたり、やぶいたり、あるいは、飛驒にちかよらないように注意するような行動をとることもかんがえられる。しかし、葉蔵は「木炭紙を2つにおる」行動をとった。しかも、「あわてておった」のである。その後、葉蔵はさらに、ふたつおりした木炭紙をよっつにおりたたんだ。葉蔵は飛驒に画をみせないのと同時に、その画をかくことをやめたのである。述語があらわす「(葉蔵がおこなった木炭紙をふたつに)おった」という動作は、葉蔵が画をかいていたうごきをやめたことをあらわしていると同時に、葉蔵が飛驒にみせたくないきもちのあらわれであり、葉蔵が飛驒にスケッチをみせまいととった突発的な処置であることが、前後する文連続にあるほかの文や文の成分がさししめす内容によって説明され、「おってしまふ」が使用されているのである。いいかえれば、「してしまふ」文が存在する文連続は、「(葉蔵の木炭紙を)おった」という動作の実現が強調されていることがらであることを、よみ手が理解できるように構築されている。

もう1つ例をみてみよう。例文、「彼女(尾崎ふみ子)はあきらめて、紙切れをハンドバッグに入れてしまった。」が存在する文連続には、「彼女・尾崎ふみ子」と「何人かの同僚教師」が登場人物として存在する。状況設定は、「昼休みの教職員室」である。

3) ①尾崎ふみ子は向いあった自分の机にいて、心がみだれた。たずねてあ

げたくもあり、なぐさめたりはげましたりしてあげたい気もするが、みんなの見ている所でそれを言い出す勇気がなかった。彼女は沢田が三人の生徒を叱っているところを廊下から見て知っている。こまかい経緯までは知らないが、いまさら大問題にされるような事件が起きていたとは思われない。¶②彼女は小さい紙切れに鉛筆で書いてみた。(先生のこと、いろいろなうわさがあるようですが、お気になさらないで下さい。私は信じております)¶けれどもその紙切れを、彼に手渡す機会がなかった。機会があっても、彼女にそれだけの勇気がなかった。彼女はまるで恋文を渡す時のような羞恥を感じて、固くなっていた。職員室のなかには三十数人の教師が机をならべていた。③みんなが注意ぶかい好奇の眼で沢田先生を見ている。④彼女はあきらめて、紙切れをハンドバッグに入れてしまった。¶彼女はまだ、この事件の動いて行く道筋に気がついてはいなかった。彼女のみならず、沢田自身も、熊井校長も、校務主任も、一条太郎も、だれも知らなかった。(人間の壁・中)

「してしまう」文がつかわれているのは、4つ目の出来事を描写する文である。沢田先生が学生を体罰し、ケガをさせた、といううわさがささやかれているなか、その一部始終をみていた彼女(尾崎ふみ子)は沢田先生をはげますつもりで、紙きれにメッセージをかき、わたそうとしていた。しかし、「みんなが注意ぶかい好奇の眼で沢田先生を見ている」なか、彼女(尾崎ふみ子)は「けれどもその紙切れを、彼に手渡す機会がなかった」と、「機会があっても、彼女にそれだけの勇気がなかった」のであった。さらに、修飾語「あきらめて」があらわす彼女(尾崎ふみ子)の様子とあわせ、「紙切れをハンドバッグにいれた」動作は、彼女(尾崎ふみ子)にとって、紙切れを沢田先生にわたすことをあきらめた結果おこなった動作であり、不本意な動作ともいえよう。「彼女(尾崎ふみ子)が沢田先生に紙切れをわたそうとする場面の描写」でまとめあげられる、いくつかの文によって構築されたこの文連続において、「彼女はあきらめて、紙切れをハンドバッグに入れてしまった。」の文もまた、ほかの文や文の成分がさししめす内容によって、「この出来事は(相対的に)強調されている」ことがしめされ、「してしまう」動詞がつかわれるのである。

とりあげてきた例文、「(作阿弥は) 大いそぎで、ゆたんのような唐草模様の大きな布を、ふわりと、彫りかけの馬の像に掛けてしまった。」「葉蔵は、あわててその木炭紙を二つに折ってしまった。」、あるいは「彼女(尾崎ふみ子)はあきらめて、紙切れをハンドバッグに入れてしまった。」において、動作のし手=登場人物(「作阿弥」、「葉蔵」、「彼女(尾崎ふみ子)」)にとって、述語「(布を) かけてしまった」、「(木炭紙を) おってしまった」、「(紙切れを) いれてしまった」



があらわす動作のいずれも、「突発的な処置」であったり、「不本意（予定外）」であったりする。それらの動作は、なにゆえ、「突発的」であるのか、あるいは、「不本意（予定外）」であるのかについては、「してしまう」文に前後する文連続内に説明されており、「布をかけってしまった」、「木炭紙を2つにおってしまった」、「紙切れを入れてしまった」があらわす動作は、それぞれの文連続において、「しめされている一定の根拠（文脈）にささえられている、（かたり手の評価による）強調される（登場人物＝動作のし手の）実現された動作」なのである。「作阿弥」「葉蔵」「彼女（尾崎ふみ子）」のようないわゆる3人称小説から採取した「してしまう」文の例のほかに、「ぼく」、あるいは「わたし」がおもな登場人物である、1人称小説のばあいでも、「してしまう」動詞の使用が、「してしまう」文が存在する文連続内において、「しめされている一定の根拠（文脈）にささえられている、（かたり手の評価による、登場人物＝動作のし手の）実現された動作の強調」にもちいられる。

例4)「(私は) ということばがまたまた頭の中に浮かんできて、両手がわなわなと震えてしまった。」をみてみよう。

- 4) ¶①私は道の小石を蹴っとぼしながら家に帰った。¶家には誰もいなかった。②私はこれさいわいと押し入れからシーツをひっぱりだして、幅五十センチくらいの帯状に折り、それを腰にぐるぐると巻いて母親の三面鏡の前に立ってみた。もしも鼓笛隊のメンバーになれたら、白いスカートを買ってくれるという約束は既に取りつけてあった。今日のオーディションの完璧な出来からいって、合格するのはほぼ間違いなかったから、問題は私に白いスカートが似合うかどうかだけだった。「もうちょっと丈が短いな」¶③と、私は腰に巻いたシーツをよっこらしよと持ち上げた。すると膝のところからふとももにかけて急激に太くなっている私の足が露呈され、我ながら目を覆いたくなるような姿であった。「白いスカートが似合うと思ってんのかよ」¶④ということばがまたまた頭の中に浮かんできて、両手がわなわなと震えてしまった。「だめだ……」¶白いスカートが似合わないのは明らかだった。(膝小僧の神様)

「してしまう」文が存在する文連続には「私」という登場人物しか存在しない。おもな状況設定（背景設定）は「私」のおうちである。「してしまう」動詞がつかわれているのは4つ目の具体的な出来事を描写する文である。説明をつけくわえると、ある日、「私」という登場人物は、小学校の鼓笛隊にはいるためのオーディションをうけ、そのかえりに、同じクラスの男の子に「(鼓笛隊のメンバーがはく) 白いスカートが似合うと思ってんのかよ」とからかわれた。そのため、「私」はいえにかえるなり、シーツをつかって白いスカートをはくマネをし、自

分のすがたを鏡で確認した。しかし、やはりにあわなかった。そのさいに、「私」はからかわれたことば、「白いスカートが似合うと思ってんのかよ」をおもいうかべて、「両手がふるえてしまった」のである。「私」がクラスの男子にからかわれた出来事は、ここにとりだしている文連続より以前の文脈に描写されており、われわれよみ手はそれを予備知識としてもつことができる。しかし、そのことは、「私」が「(手が)ふるえてしまった」直接の理由ではない。

「私」は、家にかえり、鏡の前で自分の白いスカートすがたを確認しながら、「今日のオーディションの完璧な出来からいって、合格するのはほぼ間違いなかったから、問題は私に白いスカートが似合うかどうか(だけだった)」をかんがえていた。「すると膝のところからふとももにかけて急激に太くなっている私の足が露呈され、我ながら目を覆いたくなるような姿であった」ということに「私」が直面しながら、からかわれたことば、「白いスカートが似合うと思ってんのかよ」をおもいうかべ、「両手がふるえてしまった」のである。「(私の)両手がふるえた」動作が発生にいたるまでのいきさつ、そして、「私」が足の太さを気にする心情などがくわしく前後する文連続にあるほかの文にさししめされている。それによって、述語につかわれる「(両手が)ふるえてしまった」があらわす、強調という意義づけをもたされている「私」がおこなった動作は、鏡にうつっている自分のみにくいすがたを確認した「私」による突発的な生理反応であり、「私」の心情のあらわれでもあることが容易によみ手に理解してもらえるのであろう。やはり4)の「してしまう」文が存在する文連続は、「(両手が)ふるえた」という動作の実現が強調されていることからであることを、よみ手が理解できるように構築されている。

#### 4. おわりに

「してしまう」ははやくから、『文法教育』(1963)に「すがた」というカテゴリーでとりあげられ、「終結態」となづけられた。高橋(1969:金田一(1976)所収)「すがたともくろみ」や、『にっぽんご 4の上』と、その解説書としてかかれた鈴木(1972)『日本語文法・形態論』にも、そのとらえ方がうけつがれる。しかし、藤井(1992)では、「してしまう」の基本的な意味を《「話し手の現実に対する感情・評価的な態度」をあらわすこと》と規定し、高橋(1969)(1989:2003所収)、鈴木(1972)、吉川(1973:金田一(1976)所収)のような、「してしまう」の基本的な意味・機能をいわゆるアスペクティックなもの(「動作の終了・実現」)にもとめたことに問題があると指摘し、「してしまう」を「モダリティーを構成するひとつのファクターである」(p.22)と位置づけた。

それまで、アスペクト的な意味の1つのない手とみなされてきた「してしまう」は、藤井(1992)によってその位置づけについての問題が提起された、といえる。以前、「してしまう」がつかわれる「すると」のかたちをとるつきそい文をもつあわせ文、「～してしまうと、～。」のなかの時間的な関係をあらわす文<sup>10</sup>をとりだし、分析をおこなったことがある(呉(2005))<sup>11</sup>。その結果、本稿であつかう小説の地の文につかわれる終止的なかたちをとる「してしまう」動詞とかなりちがう使用事実にあることにぶつかる。同じく小説の地の文ではあるが、「すると」のかたちをとるつきそい文の述語「してしまう」は、《1つの場面を描写する段落のなかで1つの区切りをつける》機能をもっているものであり、つきそい文の述語につかわれる「してしまう」動詞は、もはや、単に文につかわれるさいの位置によって、ことなる機能をなしているともみにはとどまらず、両者のあいだに、質的なちがいがあるようにおもわれる。そして、そこでも、藤井のいう「話し手の感情・評価的な態度」をみいだすことができなかった。おそらく、つきそい文の述語につかわれる「してしまう」動詞は、いいおわり文の述語につかわれる「してしまう」動詞よりも、補助動詞の「しまう」がもつ語意的な意味(おわりまでおこなう、完了)がよりつよくのこっていると推測できる<sup>12</sup>。

本稿においての分析や記述はきわめて限定的ではあるものの、少なくとも「してしまう」動詞には、「登場人物がおこなった動作の実現にたいするかたり手(登場人物)の強調的な態度」をあらわす用法があることをしめし、会話文とちがって、地の文において、一般的にいわれる否定的な(マイナス的な)感情・評価をあらわさないことをもしめしたのであるといえよう。

### 【注】

- 1 ここでは分析的なかたちを分析的な構造にいかえてもかまわない。ごく一般的にイメージされる派生動詞とよばれる単位のおおくは、1つの単語からなるのだが、本稿でとりあげる「してしまう」は、2単語による1単語相当なものである。「してしまう」は、形の上では、2単語であるが、実際文の中において1単語として機能する。そのほか、「してある」「しておく」「してもらう」などもそれである。「している」(継続相)のばあいは、分析的なかたちをもつ「(形態論的な)形」である。英語の例にすると、「go」の過去完了(法)は、「have」+「gone」のくみあわせによって、あらわされる。
- 2 「残念や不都合、期待外」を、藤井はまとめて、「話し手の感情・評価的な態度」(藤井(1992) p.27)としている。
- 3 会話文における、終止的な述語につかわれる「してしまう」動詞の使用において、一般的にいわれている「(はなし手による)マイナス的な評価」が、地

の文において、観察できないのである。

- 4 地の文と会話文を同レベルにあつっているとおもえるような記述が藤井(1992)にある。

「地の文における「してしまう」の意味は、基本的に会話文の場合と同じである。つまり、ここでも出来事に対するさまざまな感情や評価のもち主は、話し手＝語り手だといえる。」(藤井(1992) p.35)

- 5 藤井の記述では、「いいおわり文」ではなく、「ひとえ文」という用語をつかっている。

- 6 鈴木(1972)(1996)を参照。

- 7 呉(2007a)および(2007b)では、「文をこえた、ひとまとまりの構文論的な統一体」とよんでいる。問題とする文が実現＝存在するための条件となる、その問題とする文をふくむ前後の文の連続(体)のことをさす。「意味段落」や「テキスト(テキスト)」ときわめてちかい単位のようにみえる。くわしくは奥田(1984)、比毛(1989)、バス(1996)、新川(1982)、呉(2007a)(2007b)を参照。

- 8 具体的には、完成相・非過去形・普通体「してしまう」、完成相・過去形・普通体「してしまった」、完成相・非過去形・丁寧体「してまいります」、完成相・過去形・丁寧体「してまいりました」の4つのかたちをとる、「してしまう」動詞が終止的な述語につかわれる文を分析対象としてあつかう。以下、まとめて「してしまう」を代表とし、「してしまう」文とよぶことにする。

- 9 例文にくわえられている下線について：登場人物の具体的な動作をさししめす文に棒線を、登場人物の心情描写(登場人物のかんがえやおもい)、背景描写(登場人物が存在する空間にかんする描写)をさししめす文に波線を、登場人物の発言に破線をそれぞれひくことにする。二重線は「してしまう」動詞があらわす(実現された)動作をくわしくする修飾語(主にし手の様子、動作の程度・量)につかう。なお、行をあらためるかわりに、行頭一字さげのめじるしとして、「¶」をもちいる。

- 10 それらの例文がさししめす対象的な内容は「同一動作主によっておこなわれた個別的な・一回的な意味をもった、継起的な関係をもつ複数の動作的な出来事」に一般化することができる。

- 11 「すると」のかたちをとるつきそい文の述語につかわれる「してしまう」は、直接的に、間接的に、あたえられた段落でとらえられている活動をしめくくる動作が、終了をむかえたことをさししめす、ということがいえるだろう。「してしまう」は、その活動が成立するまでの一連の動作・プロセスに一区切りをつけ、さらなる動作との境目をきわだたせるのである。「すると」のかたちを

とるつきそい文の述語「してしまう」は、その動作を内包する大きな動作（活動）の区切りとなる動作をさししめし、ある場面で小さな区切りをつける機能をもつ、と規定することができるだろう。」呉（2005）p.40）

- 12 実際、いいおわり文の述語につかわれる「してしまう」動詞の一部にも、「しまう」がもつ語意的な意味（おわりまでおこなう、完了）がよりつよくのこっているようなものがある。たとえば、「いってしまおう」や「きえてしまおう」がそれである。

### 【参考文献】

- イー・イー・バス（1996）「段落の諸問題－文献の概観と研究の見とおし」（『ことばの科学7』むぎ書房）
- 奥田靖雄（1984）「文のこと」（『ことばの研究・序説』むぎ書房）
- 奥田靖雄（1997）「かたり小説のかたり手」（教育科学研究会国語部会・小原集会 講義プリント）
- 金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』（むぎ書房）
- 呉幸栄（2005）「つきそい文の述語に「してしまう」がつかわれるあわせ文－「～してしまうと」を中心に－」（『日本文学研究誌 第3輯』大東文化大学大学院文学研究科日本文学専攻）
- 呉幸栄（2007a）「小説の地の文につかわれる「してしまう」文」（『国文学 解釈と鑑賞』第72巻1号 至文堂）
- 呉幸栄（2007b）「地の文の述語につかわれる「してしまう」」（『日本文学研究誌 第5輯』大東文化大学大学院文学研究科日本文学専攻）
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』（むぎ書房）
- 鈴木重幸（1996）『形態論・序説』（むぎ書房）
- 鈴木康之（1968）「文学作品のことば」（『教育国語』13号 むぎ書房）
- 須田義治（2003）『現代日本語のアスペクト論』（海山文化研究所）
- ジェラルド・プリンス（1991）『物語論辞典』（松柏社）
- 高橋太郎（2003）『動詞九章』（ひつじ書房）
- 比毛博（1989）「段落の構造」（『教育国語』98号 むぎ書房）
- 藤井由美（1992）「「してしまう」の意味」（『ことばの科学4』むぎ書房）
- 新川忠（1982）「段落と文」（『教育国語』70号 むぎ書房）
- 新川忠（1997）「文の《前提》をめぐって」（『教育国語』2・26号 むぎ書房）

### 【例文採集対象作品について】

本稿でつかわれている用例は、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』、同『明治

の文豪』『大正の文豪』『CD-ROM版 毎日新聞——天声人語・社説(89～89)』『青空文庫』などから採集した。そして、例文の検索や整理にあたって、日本語学研究会の外山善朗氏作のSICアプリケーションをつかっている。なお、現在SICアプリケーションの配布は中断されている。